

概要

1 気象概況

- 気象庁資料からみた、平成22年の月別の気象概況は、以下のとおりである -

1月 東日本以西では前半低温、後半高温となり、日本海側では前半一時大雪、北日本では顕著な寡照、沖縄・奄美で顕著な多照となった。

1月前半は冬型の気圧配置が続き、上旬は西日本中心に、その後は全国的に強い寒気が南下したため、日本海側では雪、太平洋側では東・西日本を中心に晴れの日が多かった。北日本では5日から6日にかけて低気圧が発達しながら北日本を通過した影響で、大荒れの天気となり、北日本太平洋側の一部で大雪となった。また、日本海側では東・西日本中心に中旬前半にかけて降雪量が多くなり、新潟県の十日町では2006年以来4年ぶりに積雪が3メートルを越えた。中旬後半は移動性高気圧に覆われ全国的に晴れ、気温も平年を上回った。下旬は数日の周期で低気圧が通過し、その後は北日本を中心とした冬型の気圧配置となった。このため、北・東日本日本海側で曇りや雪又は雨が多く、北・東日本太平洋側や西日本では21日頃と28日頃及び月末に低気圧の影響で天気が崩れたほかはおおむね晴れた。沖縄・奄美では寒気や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多かったが、中旬後半に高気圧に覆われ晴れの日が続いたことから、月間日照時間はかなり多かった。

2月 全国的に気温の変動が大きく、下旬には全国各地で記録的な高温、日本海側の一部では上旬に大雪となった。

月のはじめと中頃に寒気の影響で一時的に低温となったが、上旬後半と下旬には南からの暖かい空気が流れ込んで全国的に気温が高くなり、気温の変動が大きかった。また、太平洋側では東日本を中心に低気圧や前線の影響で平年に比べ曇りや雨又は雪の日が多く、東京では雪を観測した日数が10日におよび、26年ぶりの多さとなった。

上旬前半は非常に強い寒気が流れ込んだため、北日本では顕著な低温になるとともに北陸地方では降雪量が多くなり、新潟市では26年ぶりに積雪が80cmを越えた（5日に81cmを観測）。上旬の終わり以降は、冬型の気圧配置が長続きしなかった。中旬は前線を伴った低気圧が日本付近を頻繁に通過したため全国的に曇りや雨又は雪の日が多く、気温及び日照時間が平年を下回った。下旬は一転して全国的に暖かい日が多くなり、25日を中心に多くの地点で2月の日最高気温の高い記録を更新するなど、全国で旬平均気温がかなり高かった。

3月 北日本から西日本にかけては顕著な多雨で日照時間も少なかった。沖縄・奄美では降水量がかなり少なかった。東・西日本と沖縄・奄美では月平均気温が高かったが、気温の変動が大きかった。

日本の南で高気圧が平年より強かったため、南から暖かく湿った気流が入りやすく、北日本から西日本にかけては、低気圧や前線の影響を受けやすかった。上旬は本州付近を次々と低気圧が通り天気がぐずついていたほか、中旬以降も数日おきに低気圧が本州付近を通過し、平年に比べ曇りや雨又は雪の日が多かった。このため、北日本日本海側と東・西日本では月降水量はかなり多く、特に東日本太平洋側では地域の統計を始めた1946年以来、3月としての最大値を更新した。また、北日本と東日本日本海側、西日本日本海側では月間日照時間がかなり少なく、北日本日本海側と東日本日本海側では3月としての最小値を更新した。

一方、沖縄・奄美では、低気圧や前線が平年より北を通過することが多かったため平年に比べ晴れの日が多く、月降水量はかなり少なかった。

月平均気温は、北日本で平年並み、東日本以西で高かったが気温の変動が大きかった。上旬と中旬は、一時的に寒気の影響を受けた上旬の終わりを除き、南から暖かい空気が入り気温は平年を上回る日が多かった。一方、月末にはこの時期としては強い寒気が流れ込んだ影響で全国的に顕著な低温となった。

4月 全国的に日照時間がかなり少なく東・西日本では降水量がかなり多かった。東・西日本では気温がかなり低かった。関東地方を中心に記録的に遅い雪。

前線を伴った低気圧が日本付近を頻繁に通過したため曇りや雨の日が多く、全国的に日照時間がかなり少なかった。

また、東・西日本では降水量がかなり多かった。北・東・西日本では、前半は低気圧が1～2日おきに通過したためその前後で気温の日々の変動が大きくなった一方、後半は4月としては強い寒気が断続的に流れ込んだため気温が平年を大幅に下回った。特に、東・西日本では月平均気温がかなり低くなった。

17日には、顕著な低温の中、本州の南海上を低気圧が通過したため関東甲信地方から東北地方南部にかけての広い範囲で降雪及び積雪を観測し、東京・横浜・熊谷・前橋・宇都宮・甲府では41年前の1969年に観測した最も遅い降雪の記録に並んだ。

5月 北日本から西日本にかけて気温の変動が大きかった。北日本太平洋側で月降水量がかなり多く、下旬は北日本から西日本にかけて大雨となった。

上・中旬は、東・西日本は移動性高気圧に覆われ晴れの日が多かったが、東日本日本海側では寒気の影響で一時天気がぐずついた。一方、北日本は動きの遅い低気圧や寒気の影響で、沖縄・奄美は前線や低気圧の影響で、曇りや雨の日が多かった。

下旬は、北日本から西日本にかけては、本州の太平洋沿岸を進んだ低気圧や日本海を東進した上空に強い寒気を伴う低気圧の動きが遅かった影響で、曇りや雨の日が多かった。一方、沖縄・奄美では天気は数日の周期で変わった。

22日～25日は、北日本から西日本にかけて大雨となり、石巻（宮城県）、岡山、宇和島（愛媛県）、雲仙岳（長崎県）、牛深（熊本県）では5月としての日降水量の最大値を更新した。

北日本太平洋側では、月を通して動きの遅い低気圧の影響を受けることが多く、月降水量がかなり多かった。また、北日本から西日本にかけては、月を通して気温の変動が大きく、上旬と中旬後半～下旬前半は、南よりの暖かい空気が流れ込みやすく、気温は平年を大きく上回ったが、中旬前半と下旬後半は、強い寒気が南下したため、気温は平年を大きく下回った。

6月 北日本では月平均気温がかなり高く、西日本太平洋側では月降水量が多かった。沖縄・奄美では月間日照時間がかなり少なかった。

月の前半は、梅雨前線は日本の南海上に停滞し、本州付近は移動性高気圧に覆われたため、北日本から西日本にかけては晴れの日が多かったが、沖縄・奄美では曇りや雨の日が多かった。月の後半には梅雨前線は本州付近まで北上し、太平洋高気圧の縁を回る湿った気流の影響もあり西日本を中心に梅雨前線の活動が活発化した。このため、東日本、西日本では曇りや雨の日が多く、西日本太平洋側では月降水量が多くなった。一方、北日本では高気圧と低気圧の影響を交互に受け天気は周期的に変わった。沖縄・奄美では、中旬末から太平洋高気圧に覆われて晴れる日があったが、暖かく湿った気流の影響で曇りや雨の日もあり、月間日照時間がかなり少なくなった。気温は、月のはじめは寒気の影響により全国的に低温となったが、その後は気温が上がり、北日本から西日本にかけて月平均気温が高くなった。特にこの時期としては顕著に暖かい空気に覆われた北日本では、1946年の統計開始以来第2位の高い記録となった。また、26日には帯広で猛暑日となったほか、釧路では年を通じての日最高気温の最高値を更新した。

7月 中旬は東・西日本で記録的な大雨となった。北・東日本では月平均気温はかなり高く、東日本の下旬の平均気温は7月下旬としては過去最も高い記録を更新した。北海道地方と沖縄・奄美では月降水量がかなり多く月間日照時間はかなり少なかった。

上旬は梅雨前線が本州付近から本州の南に位置することが多く、全国的に曇りや雨の日が多かった。中旬になると、梅雨前線は本州付近から日本海まで北上し、太平洋高気圧の縁辺を回って南から非常に暖かく湿った空気が流れ込んだため、東・西日本では記録的な大雨となったところがあり、九州、中国、東海地方を中心に浸水害や土砂災害などが発生した。中旬の終わり頃からは太平洋高気圧が日本付近で強まったため、東日本以西では晴れの日が多くなり、東日本を中心に日最高気温35以上の猛暑日となるなど各地で厳しい暑さが続いた。一方、北海道地方と沖縄・奄美では南からの暖かく湿った気流の影響を受けやすかったため、平年に比べ曇りや雨の日が多かった。このため、北海道地方と沖縄・奄美では月降水量がかなり多く、月間日照時間はかなり少なかった。

北日本での気温は、例年ではこの時期に現れることの多いオホーツク海高気圧の影響がほとんどなく、南からの暖かく湿った空気が流れ込みやすい状態が続いたため、上旬の平均気温は統計を開始した1961年以降、7月上旬としては第1位の高温となったのはじめ、中・下旬も平年を上回り、月平均気温はかなり高くなった。また、東日本でも下旬の平均気温が7月下旬としては1961年以降第1位の高温となったのをはじめ月を通じて平年を上回り、月平均気温はかなり高くなった。

8月 全国的に気温がかなり高く、北・東・西日本では1946年以降最も高かった。北日本太平洋側と東・西日本では、月降水量が少なく、月間日照時間が多かった。

月を通して日本付近で太平洋高気圧の勢力が強かった。東・西日本では、太平洋高気圧に覆われ、各地で猛暑日となるなど晴れて厳しい暑さが続いた。北日本では、南から暖かい空気が入り、気温はかなり高かったものの、日本海側では前線や気圧の谷の影響を受け曇りや雨の日が多かった。北日本太平洋側では、前線や気圧の谷の影響は小さく、晴れの日が多かった。沖縄・奄美では、太平洋高気圧に覆われ晴れて暑い日が多かったが、上旬後半と下旬後半は台風や湿った気流の影響で曇りや雨となった。月平均気温は全国的にかなり高く、北・東・西日本では、1946年の地域平均の統計開始以来第1位の高温となった。また、全国の77地点で8月の月平均気温の高い記録を更新した。

9月 全国的に気温はかなり高く、東・西日本を中心に残暑が厳しかった。東・西日本太平洋側では多照、西日本太平洋側では少雨、東日本日本海側では多雨となった。

上旬から中旬にかけては、太平洋高気圧の勢力が日本の南で強く、秋雨前線は日本海から北日本で活動が活発化することがあった。下旬は太平洋高気圧が弱まり秋雨前線が本州の南岸に南下した。

西日本と東日本太平洋側では上旬から中旬にかけては晴れの日が多く、上旬を中心に広く猛暑日となるなど残暑が厳しかったが、下旬は天気が周期的に変わり、気温が急激に低下して平年を下回る日があった。東・西日本太平洋側では日照時間がかなり多く、西日本太平洋側の降水量はかなり少なかった。

北日本から東日本日本海側にかけての天気は数日の周期で変わり、日本海側を中心に大雨となった所があり、東日本日本海側では、台風第9号の影響もあって降水量がかなり多くなった。気温は中旬までは暖かい空気に覆われてかなり高かったが、下旬は下がり北日本では低くなった。

一方、沖縄・奄美では中旬までは台風や熱帯低気圧の影響で天気は数日の周期で変わったが、下旬は太平洋高気圧に覆われて晴れの日が多く、気温は中旬を中心にかなり高かった。

10月 月平均気温は全国で高かった。中旬の終わりには奄美地方で記録的な大雨となった。北・東日本太平洋側と西日本、沖縄・奄美では月間日照時間がかなり少なかった。

上旬と中旬は、北・東・西日本では天気は数日の周期で変わったが、沖縄・奄美では低気圧や前線の影響により曇りや雨の日が多かった。特に中旬後半には奄美地方で、前線と台風第13号からの非常に湿った気流の影響で記録的な大雨となり甚大な災害が発生した。下旬は、前半は東日本以西では前線の影響により曇りや雨の日が多かった一方、北日本では晴れの日が多かった。しかし下旬の後半には一時的に冬型の気圧配置となり全国的に気温が平年を下回り北日本では平地でも降雪を観測したところがあった。また月末には台風第14号が、沖縄・奄美と、近畿地方から東北太平洋側にかけて接近し、東日本太平洋側を中心に大雨となった。

前線や台風などの影響により月を通じて曇りや雨の日が多かった沖縄・奄美では、月降水量がかなり多く、月間日照時間はかなり少なかった。また、北・東日本太平洋側と西日本でも低気圧や前線などの影響を受けやすかったため月間日照時間がかなり少なかった。特に、西日本日本海側の月間日照時間は10月としては1946年の統計開始以来少ない方から1位タイの記録となった。

気温は、下旬は強い寒気の影響で平年を下回った時期があったものの、そのほかは寒気の影響はほとんどなく、上旬から中旬にかけては季節外れの暖かい空気に覆われて北・東日本を中心に気温が平年を大幅に上回った時期があるなど、全国的に平年を上回る日が多かった。このため月平均気温は、全国的に高く、東・西日本ではかなり高かった。

11月 東・西日本では半年ぶりに月平均気温が平年並みに下がった。西日本では降水量が少なく日照時間が多かった。沖縄・奄美では日照時間が少なかった。

中国大陸東岸から東シナ海付近で偏西風が南に蛇行し、東日本以西では10月までに比べて寒気の影響を受けやすく、月平均気温が平年並みになった。東・西日本で月平均気温が平年並みまで下がったのは、いずれも5月以来である。天気は、北～西日本ではおおむね数日の周期で変化した。北日本は冬型の気圧配置が持続することがなく、気温が高かった。移動性高気圧が本州付近を通過することが多かったため西日本と東日本太平洋側では日照時間が多く（西日本日本海側ではかなり多く）、西日本では降水量が少なかった（西日本日本海側ではかなり少なかった）。沖縄・奄美は移動性高気圧の南縁に位置することが多く、また、気圧の谷の通過時には低気圧や前線の影響を受けたため、晴れの日が少なかった。なお12～13日には、西～東日本を中心とした広い範囲で黄砂を観測した。黄砂の観測は西日本では11月としては5年ぶり、東京都心では11～12月としては28年ぶりであった。

12月 北・東日本の月平均気温はかなり高かった。北日本から西日本にかけては月降水量がかなり多かった。下旬中頃から日本海側中心に大雨となった。

下旬はじめまでは冬型の気圧配置は長続きせず、低気圧が短い周期で通過した。北・東日本では、12月としては暖かい空気に覆われる日が多く、月平均気温がかなり高かった。天気は、北日本では曇りや雨又は雪の日が多く、東・西日本と沖縄・奄美ではおおむね数日の周期で変わった。2～3日は前線を伴った低気圧が本州の日本海沿岸を発達しながら北上し、太平洋側を中心に大雨となった。21～23日は、低気圧が本州の南岸沿いを進み、三陸沿岸で発達したため、東北太平洋側を中心に大雨となり、北海道太平洋側では大雪となった。北日本から西日本にかけては月降水量がかなり多く、北日本太平洋側では1946年以降で12月として最も多かった。下旬後半は日本の上空には次々と強い寒気が南下し、25日は北日本日本海側を中心に、31日は西日本日本海側を中心に大雪となり、記録的な積雪となるところがあった。また、31日は低気圧の影響で岩手県など北日本太平洋側でも内陸を中心に大雪となった。各地で交通障害や停電、なだれなどの被害が発生した。

表 1 梅雨入り・梅雨明けの状況（平成22年）

梅雨入り

地 域	本年	平年	前年
沖 縄	5 月 6 日頃	5 月 8 日頃	5 月18日頃
奄 美	5 月 6 日頃	5 月10日頃	5 月18日頃
九州南部	6 月12日頃	5 月29日頃	6 月 2 日頃
九州北部	6 月12日頃	6 月 5 日頃	6 月 3 日頃
四 国	6 月13日頃	6 月 4 日頃	6 月 3 日頃
中 国	6 月13日頃	6 月 6 日頃	6 月 3 日頃
近 畿	6 月13日頃	6 月 6 日頃	6 月 3 日頃
東 海	6 月13日頃	6 月 8 日頃	6 月 3 日頃
関東甲信	6 月13日頃	6 月 8 日頃	6 月 3 日頃
北 陸	6 月13日頃	6 月10日頃	6 月 3 日頃
東北南部	6 月14日頃	6 月10日頃	6 月 4 日頃
東北北部	6 月16日頃	6 月12日頃	6 月 4 日頃

注：気象庁資料による（以下の表も同じ。）。

梅雨明け

地 域	本年	平年	前年
沖 縄	6 月19日頃	6 月23日頃	7 月 6 日頃
奄 美	7 月15日頃	6 月28日頃	7 月 5 日頃
九州南部	7 月20日頃	7 月13日頃	7 月12日頃
九州北部	7 月17日頃	7 月18日頃	8 月 4 日頃
四 国	7 月17日頃	7 月17日頃	7 月30日頃
中 国	7 月17日頃	7 月20日頃	特定しない
近 畿	7 月17日頃	7 月19日頃	8 月 3 日頃
東 海	7 月17日頃	7 月20日頃	8 月 3 日頃
関東甲信	7 月17日頃	7 月20日頃	7 月14日頃
北 陸	7 月17日頃	7 月22日頃	特定しない
東北南部	7 月18日頃	7 月23日頃	特定しない
東北北部	7 月18日頃	7 月27日頃	特定しない

2 被害概況

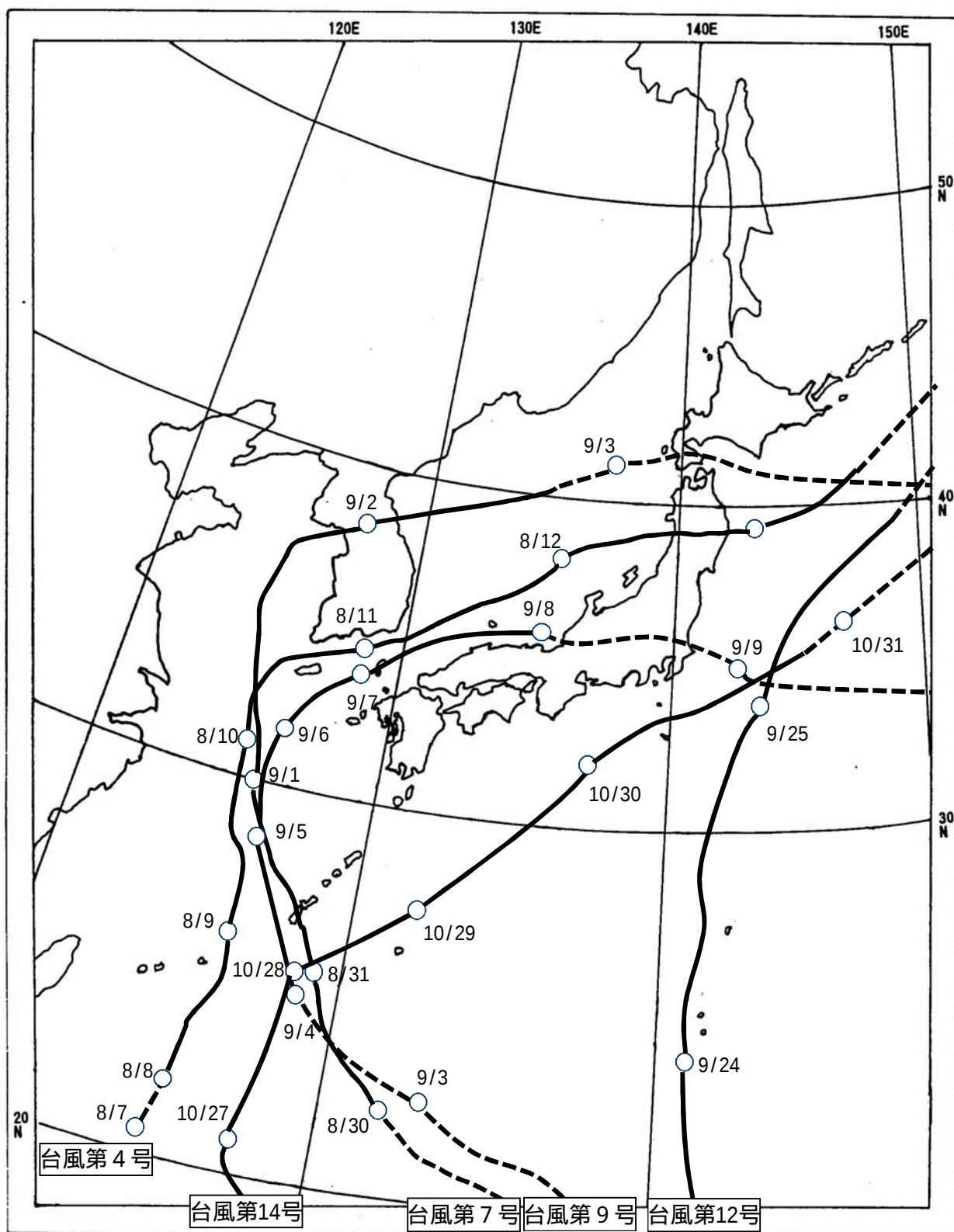
平成22年は、3月下旬の降霜により、果樹や工芸農作物を中心に88億円の農作物被害が発生した。

また、4月中旬の低温・積雪等により果樹を中心に16億円の農作物被害が発生した。

表2 平成22年に発生した主要災害種類別被害概要（総数）

災害種類名	被害発生時期	被害面積 ha	被害見込金額 億円	主な被害農作物	主な被害地域
3月下旬の降霜	3月下旬	26 900	88	果樹 工芸農作物（茶）	和歌山県、熊本県 静岡県
4月中旬の低温 ・積雪等	4月中旬	2 720	16	果樹（日本なし）	鳥取県

3 平成22年に日本列島に上陸・接近した台風経路図



- 注：1 経路上の○印は傍らに示した日の午前9時の位置を示す。
 2 経路の実線は台風、破線は熱帯低気圧・温帯低気圧の期間を示す。
 3 気象庁資料から作成した。